

第十一回 教行信証に学ぶ会 講師：延塚知道先生

ライブ版

2021(令和3)年8月19日 会場 円徳寺

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

どうもこんにちは。それでは「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいづれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経藏に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

どうもこんにちは、大変な中をよくおでかけくださいました。何か大きな責任を感じます。先日7月の17日からでしたけれども、7月いっぱい、丁度二週間です。中一日だけ休みがあったのですが、東本願寺で安居(あんご)という宗派で一番大きな学習会、研修会がありました。全国からいろんなお坊さんたちが集まって来て、朝8時から昼12時まで、私は本講を務めて、次講がありますので、二人で講義をして、昼から1時から3時まで、今度は攻究をやり、ひとりの聖教を読んで、講義を聞いて、議論する。それを二週間やりますと、皆さんやっぱり勉強になるというか、もう来る方が半分以上決まっていますね、一度来ると、もうその時期は安居をしないと気持ちが悪くなるという「安居病」と言うのにかかるのです(笑)。ただまあ今年はコロナの状況でしたから人数を制限して、場所も広い場所を取って(私は本講を務めて)お話をさせていただきました。(テキスト：延塚知道著『二〇二一年安居本講』大無量寿経講讀一宗祖の視点で下巻を読む』東本願寺出版 2021年7月5日発行)

お一人お一人事情を抱えておられまして、まあよく出て来られたという方もおられるし、それから本山で長年要職に勤めておられた偉い方たちも参加しておられる。よく聞くと「実は先生、私は人には言つてなかったのですが、ガンなのです。なので命がどれだけあるか保証ができない、だからどうしても今年は来たかったです」と言つて出席されている方、その他、いろいろね。講義をしているとピリピリと音が鳴るのです。携帯かと思うとそうではなくて、どうも血糖値を外から調整しないといけない人たち、そういう人も何人か来ていました。要するに命がけでしたね。ですから私の方もとても応援

出る力はありませんけれども、親鸞聖人の方が語ってくださいさと思つて一生懸命お話ししてきました。まあ二週間大変でしたけども、私は楽しかった。楽しかったし、嬉しかったし、まあ皆さんと勉強して本当によかつたなあと言うか、皆さん後で感想を述べたり、謝辞を述べたりしてくださつて、大変有難かつたと思つています。九州から西藤さんが付いて来てくださつて世話を下さつたので、大変助かりました。ますます、きちつと親鸞聖人の教えを伝えなければならぬ。そういう気持ちで新たにしました。

皆さんと、今拝読しているのは『教行信証』の巻ですけども、これまでお話しした通り、曇鸞以降、『大経』についてお語りになつた方は親鸞聖人が初めてと言つてもいいと思います。もちろん七祖の方たちは『大経』を「群萌の仏道」として読んでおられたに違ひない。龍樹天親は菩薩ですから、これは別として、群萌の仏道しかし親鸞聖人以外に『大経』について明確に語ってくださいた七祖の方は曇鸞以降はないのです。道綽、善導、源信、源空、これはみな『観経』でしょう。そうすると『大経』についてお語りになつた方は親鸞聖人しかいないのです。この『教行信証』が、親鸞聖人が『大経』を「群萌の仏道」、群萌と言うのはわかりますね。わたしたちのような、とるにたらない、そういう私たちが念仏一つで救われていくという、そういう道理を明確に『教行信証』に明らかにしていったわけです。

ですから、私は安居の時にも申しましたのですが、江戸時代の学者たち、講録と言いますが、そういう人たちは、親鸞聖人がお決めになつたこと、例えば七祖、それから私がよく言う「真仮八願」をお選びになつたこと、あるいは、それ以上沢山あります、まだ、少しづつ言えば、『教行信証』のここになぜこういう文章があるのか、なぜ親鸞聖人の己証である「三問答」と「三経一異の問答」に源信の文章があるのか。そういうことは、いちいちその理由がわからない

と親鸞聖人のお心がわかつたことにならないと思ひますが、江戸時代までは「宗祖がお決めになつたことを末学が詮索する資格はない」と、こう言つて、そういうことを考える人は異安心として決めつけられたのです。だから長年、今も私の前までは、そういうふうに関親聖人のお決めになつたことを詮索するというのは、それは越権行為であると言つので、だれからも相手にされない。要するにそういうことです。

曾我量深という人がちよつとやつたものだから、曾我さんは異安心として位置づけられました。私はまあ異安心にはならなかつたから、時代が変わつたのでしよう。曾我さんの時代だったら私は多分異安心になつたでしょうね。だけど時代がそういう時代じゃなくなつて、確かに学問として、近代の学問としてですよ、世界の学問として考へたときに、お書きになつた人のお心がわからないようなものは学問になりません。だから僕は「異安心として今までやつてきた」と言つて、安居の報恩講の時のお話で申し上げた。何と言つるか、涙が出てしようがなかつたけど。そんなふうに関親の前の先生方で、そういうことを問うた人がいないために参考書は一冊もないし、だから宗祖の『教行信証』とにらみ合つてこれまで何十年もやつてきました。そして、その理由を尋ねた結果、はつきりわかりました。「すべての理由は『大経』にある」と。さすがに親鸞という方だと思つて、「親鸞の個人的な意見とか、個人的な理由じゃなくて、理由を尋ねていくと全部『大経』に帰着する。お釈迦様に帰着する。そういうふうに関親信証』が成り立っているのだ」とわかつて私は感動しました。ですから今回『大経』を講義させていただいたわけです。

それで、群萌をそのまま救うということは、こちら側に何の条件も付けないということです。そうするとそんな馬鹿なことがあるかと言つのが常識になります。ところがそうではないのだと、名号とこう

言つても、それは皆さんご存知のように法蔵菩薩が五劫の間思惟し、永遠の間苦勞しながら、群萌全体を丸ごと救うのはどうしたらいいか、それに悩み悩んでやつと選び取つたのが「選択本願の名号」です。だからこれは私たちの行と言うよりも、むしろ如来の方が選び取つた名号である。それもこれまでのようによくできる人を救うというのではなくて、むしろできない人をどう救うか、それに苦勞して選び取つた名号である。しかもその法蔵菩薩はご存知のように「法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず。こ」とばもたえたり。」(『唯信鈔文意』、東聖典554、西709〜710、島20-8)と言うところから、つまり覚りの方が立ち上がつて、だから、覺りを立ち上がらせたのは私たちの方なのです。凡夫がおるから、苦しんでいる凡夫がおるから覺りの方が立ち上がつて、そして法蔵菩薩にまでなつた。つまり因の法蔵菩薩のご苦勞と、最終的な結果としての覺りとが、私たちの分別で考えたと別だと考えるのですが、もともと一つなのです。だから法蔵菩薩のご苦勞による名号なのだと言つた時には、そのまま仏様の世界に在るのだという感動をあたえるような教え、それが『大經』の本願の教えと「選択本願の名号の教え」ということになります。

これは解説ですから、もうこれ以上解説できない。わかっている人はわかっています、解説しなくても。多分この中に南無阿彌陀仏と頭を下げて、はじめて仏様の世界に頭が下がつたのだという人は、もう解説をしなくてもそうなつている。それを言っているだけの話で、凡夫と言つて、自力で救われると思つて頑張つて来たけど、どうにもならんと、南無阿彌陀仏と頭を下げた時に、「ああ、もともと大きな仏さんの世界におつたんや」ということに目覚めていく。それは解説ではなくて事実ですね。そういう世界を開く名号。それを親鸞聖人は他の仏教と選んで「大行」という名前で呼んだんですね。それは

聖道門の修行と區別して、人間のこちらからの能力を一切問わないで、仏様の方から丸ごと救うのだと。ですからこちら側は、それが信じられるか信じられないかだけです。それだけの話です。信じられないから、世間の金や地位や名誉の方に走りますけれども、けども信じられた者は仏様の世界を本国とする。私が本来帰るべき場所だと。そこに腹が決まるのだと。こう言うことになりますね。

そういう名号について説いているのが行の巻ですが、行の巻には「諸仏称名の願」、これが行の巻の目次、つまり標挙(ひょうこ)になりますね。そして各巻と同じように、この諸仏称名の願をめぐつて經典の引文が始まります。大行釈はお話しましたので、そこは省きますが、大行釈が終わると經典の引用が始まりますね。ここが大切なのですが、本当はね。『教行信証』は全部各巻そうなつてますから、前回もたぶん後半の方で少しお話をさせていただいたと思いますが、行の巻の「經文引証」(きょうもんいんしょう)は157ページのところに「諸仏称名の願」と、こうあげて『大經』に言わく、設い我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して我が名を称せずは、正覺を取らじ、と。(西141、島12-6)

これが諸仏称名の願の經典、『大經』に説かれている因願。四十八の本願の第十七番目の本願そのまま、因願ですね。それに対して、「また言わく、我仏道を成るに至りて名声十方に超えん。究竟して聞こゆるところなくは、誓う、正覺を成らじ、と。衆のために宝藏を開きて広く功德の宝を施せん。常に大衆の中にして説法師子吼せん、と。」

これが引用されます。これは皆さんご存知のように『大經』の上巻に説かれている「三誓偈」(さんせいげ)から引用されています。ですから、まず『大經』の第十七願、因願が引かれて、その次に「三誓偈」が引かれて来るんですね。普通は、例えば信の巻を開けてみましょ

うか、212ページになります。これは信の巻ですけども、「至心信樂の本願の文」と言う題をつけて、『大経』に言わく、設い我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれざれば正覺を取らじと。ただ五逆と誹謗正法を除く、と。(西212、島12-56)これは『大経』の至心信樂の願の因願ですから、ここに相当する。そうするとその次に『無量寿如来会』に言わく」とあつて、「もし我無上覺を証得せん時、余仏の刹の中のもろもの有情類、我が名を聞き已りて、所有の善根心に回向せしむ。我が国に生まれんと願じて、乃至十念せん。もし生まれずは菩提を取らじと。ただ無間悪業を造り、正法およびもろもの聖人を誹謗せんをば除く、と。已上」と。

これは『無量寿如来会』の十八願の因願の方です。わかりますね。普通は、親鸞聖人という方はものすごい学者でしたから、私たちが所依にしている康僧鎧訳の『大経』は古い訳、旧訳です。だから古い訳ではこうなっていますよ、それから『無量寿如来会』というのは新訳です。一番新しい訳です。ですから『無量寿如来会』の十八願と同じように、同じ十八願を引いて、旧訳ではこうなっていますよ、新訳ではこうなっていますよ、というふうに『大経』を引くと必ず『無量寿如来会』を、同じものを引くのが常套なのです。他のところは皆そうなっています、だいたいね。信の巻はそうでしょう。証の巻を見てみましょうか、281ページね。ここに「必至滅度の願文」と出てるでしょう。ありますね。そこに、

『大経』に言わく、設い我仏を得たらんに、国の中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずは、正覺を取らじ、と。已上、「これが『大経』、旧訳です。それに対して、『無量寿如来会』に言わく、もし我成仏せんに、国の中の有情、もし決定して等正覺を成り、大涅槃を証せずは、菩提を取らじ、と。已上(西307-308、島12-119)

これは『大経』と『無量寿如来会』。そうですね。そうすると旧訳と新訳を同じ因願を並べている。そしてその後には必ず、今度は、「願成就の文」とあつて、『大経』の願成就の文と『如来会』の願成就の文を挙げる。これもそうなっていますね。必ずそうなっているのです。わかりますね、私が言っていることは。

ところがこの行の巻に限っては、第十七願の因願が挙げられませんでしたから、その次に『無量寿如来会』の因願が挙げられれば順当なのです。ところがここは『大経』に言わく」という因願が挙げられると、『大経』の「三誓偈」が挙げられる。そして、その次に願成就の文が挙げられる。つまり『大経』の本願成就文が挙げられます。

「願成就の文、『経』に言わく、十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讚嘆したまう。已上」と。そして、「また言わく、無量寿仏の威神、十方世界に極まりなし。無量無辺不可思議の諸仏如来、彼を称嘆せざるはなし、と。已上(東聖典4158、西142、島12-7)。これは「東方偈(とうぼううげ)です。「三誓偈」の方は、思い出してください、法蔵菩薩が四十八の本願を説いて、終わるとすぐに「三誓偈」が説かれる。だから私はこれまで何度か申しましたけども、四十八の本願を三つの本願にまとめたのだというふうに申し上げました。そこには、「名号によって救われる。「凡夫が救われる」。そして、「世を超える」という救いが実現される。この三つが誓われている。これが「三誓偈」ですね。ですから「三誓偈」の方は法蔵菩薩の歌ですから、これは因願の歌です。因の歌。それに対して「東方偈」の方は『大経』の下巻にあります。それはこの因願を受けて、『大経』の本願を受けてお釈迦様が自分に体得されて、そして釈尊の成就の歌として歌われる歌です。なぜか行の巻には最初から第十七願の規定というか、例えばさつき申しましたように、信の巻だったら第十八願に限定されて、第十八願の因願と成就文。

証の巻だつたら第十一願、必至滅度の願に限定されて、因願と成就文。それから『無量寿如来会』。こうなっているわけです。

ところがどうも、この行の巻だけは引き方がおかしい。因願の後に、確かに因願の歌である「三誓偈」が引かれますし、いきなり今度は成就文が引かれて、そして成就の歌の「東方偈」が引かれて来る。その次の文章も、これは「東方偈」で一番大切なことです。

「また言わく、その仏の本願力、名を聞きて往生せんと欲せば、みなことごとくかの国に到りて自ずから不退転に致る、と。已上」。これは「東方偈」の中で一番大事な歌です。そうすると成就のところには「東方偈」が引かれて来る。そして今度は、『無量寿如来会』に言わく、「と言つて、「いま如来に対して弘誓を發せり。当に無上菩提の因を証すべし。もしもものの上願を満足せずは、十力無等尊を取らじ、と。心あるいは常行に堪えざらんものに施せん。広く貧窮を濟いてもろもの苦を免れしめ、世間を利益して安樂ならしめん、と。乃至 最勝丈夫修行し已りて、かの貧窮において伏藏とならん。善法を円満して等倫なけん。大衆の中にして師子吼せん、と。已上抄出」

これは『無量寿如来会』として引くのならば、先ほど見たように十七願の因願を引けばいいわけです。ところが『無量寿如来会』と言いながら第十七願については触れていない。すみませんね、ややこしいことを言うて、『大経』の十七願、「三誓偈」、成就文、「東方偈」、そして今度は『無量寿如来会』。そしてこれ、『無量寿如来会』の第十七願がここに来れば、まだなんとなくわかる。ところがそれも無しにいきなりここは、『無量寿如来会』の「三誓偈」の歌が引かれてくる。そうなりますね。すみませんね、ややこしいことを言うて。これ大事なんです。

そして、その次に、「また言わく、阿難、この義利をもつてのゆえに、無量無数不可思議無有等無辺世界の諸仏如来、みな共に無量寿

仏の所有の功德を称讚したまう、と。已上」

こういう文章が出てきます。これは実は『無量寿如来会』の「東方偈」の歌です。前のは『無量寿如来会』の「三誓偈」でしたね。今度は『無量寿如来会』の「東方偈」が引用されてくる。こういう引用の仕方になっているわけです。これはどういうことか、信の巻、証の巻とは違ふわけです。引用の仕方ですね。そんなことはまあ、親鸞聖人が書いた時にそうなったんじゃないのとおっしゃる方もいらつしやるかもしれませんが、そんな馬鹿なことはないのです。やっぱり理由がある。なぜ、こうなっているのか、これがなかなか解けなかつた。難しかった。普通は十七願の諸仏称名の願の因願と成就文を述べるところを、なぜ、むしろこれは『無量寿如来会』のところには願文はなく歌だけですから、そうすると親鸞聖人の諸仏称名の願ということを言う時には、どうも願文以上に「三誓偈」と「東方偈」と、これが大切だつたんだろうということとはぼんやりわかります。

『大経』も「三誓偈」、「東方偈」。『無量寿如来会』は願文もなく「三誓偈」、「東方偈」。こうなっていますね。しかも今度は、その次に『仏説諸仏阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』と、こういうのが出て来ますが、これは『大阿弥陀経』と言う古い經典です。これは二十四しか本願がありません。二十四願経。それからその次に『無量清浄平等覚経』という經典が出て来ますが、これも古い『大経』です。『大経』ですよ。『大阿弥陀経』も『無量清浄平等覚経』(『平等覚経』)も、どちらも私たちが所依にしている康僧鎧訳の『大経』と同じ仲間、古い『大経』の異訳になります。『大阿弥陀経』と『平等覚経』は二十四しか本願がありませんから、ですから、丁度私たちの『大経』の半分ですね。ということとは、願文が一緒になっている。例えば、ここで引かれるのは十七願と十八願とが一緒になっている。二十四願経はね。だからもともとは、いいですか、もともとは十

七願と十八願は一緒なのだと考えた方がいいと思います。

「ただ念仏しなさい」という教えに、「南無阿弥陀仏」と頭を下げて信じました。それは「ただ念仏しなさい」と言う方から言えば十七願。ところが信じる私たちの方からいえば十八願だから、出来事は一緒なのです。出遇いの出来事を一言で言えば、今言ったように「ただ念仏しなさい」という十七願の教えに遇うて、「私は信じます」と、こうなるのだから、だから親鸞聖人が法然上人に遇うた時の体感、この「身」の体感から言えば、もともとは「十七願と十八願とは離れない」。そう考えた方がいい。親鸞聖人もそう考えておられるから、今は問いませんが、例えば『三経往生文類』(東468、西626、島16-1)などでは十七願と十八願を一緒にしています。ですから体感から言えば一緒なのだと考えてください。そうすると『大阿弥陀経』、『平等覚経』、これは実に体感に即して説かれています。ところがそれが段々段々、どう言ったらいいか、伝承されていく間に、いや「行」は「行」、「機」は「機」と分けた方がいいんじゃないのということになって、十七願の願文と十八願の願文とが分かれていったというふう考えられます。

ですから、この『大阿弥陀経』も『平等覚経』も十七願と十八願とは同じ願文として説かれます。そこをちよつとややこしいですけど読んでみますよ。(東聖典158、西142、島12-7)『仏説諸仏阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』に言わく、第四に願ざらくとありますから、二十四願の第四の願のところに「それがし作仏せしめん時、我が名字をもつて、みな八方上下無央数の仏国に聞こえしめん。みな、諸仏のおの比丘僧大衆の中にして、我が功德・国土の善を説かしめん」。こゝまでが十七願です。名号をもつて救いたい。こういう意味ですね。そうすると今のところまでが十七願になります。ところがその十七願と一つになって「諸天・人民・蜎飛・蠕動の

類、我が名字を聞きて慈心せざるはなけん。歡喜踊躍せん者、みな我が国に來生せしめ、この願を得ていまし作仏せん。この願を得ずは、終に作仏せじ」と。已上。こゝまでが十八願です。念仏の教えをいただいて私は歡喜踊躍して、阿弥陀の国に生まれていきたいと、こゝ思うたんだという願文ね。今のところが十八願ですから、『大阿弥陀経』では第四願に十七と十八が一つになって説かれているというふう知っておいてください。

『無量壽清淨平等覚経』も同じことです。せつかくですから読んでみますね。

「我作仏せん時、我が名をして」、この名です。まず名。「我が名をして八方・上下・無数の仏国に聞かしめん。諸仏、おのおの弟子衆の中にして我が功德・国土の善を嘆ぜん」。こゝまでが十七願です。そうですね、我が名をもつてほめたいと言うんですから十七願。その次、「諸天・人民・蠕動の類、我が名字を聞きてみなことごとく踊躍せん。も、我が国に來生せしめん。しからずは我作仏せじ」と。こゝまでが第十八願になります。ですから『大阿弥陀経』も『平等覚経』もどちらも十七と十八が一つになっている願を挙げているわけです。これは十七願の諸仏称名の願について経典を引文しているのですから当然と言えば当然なわけですね。

ところがその後、二十願の文章、願が出て来るのです。『無量壽清淨平等覚経』のその十七願と十八願が一つになっている文章が出ましたね。その次に「我作仏せん時、他方仏国の人民、前世に悪のために我が名字を聞き、および正しく道のために我が国に來生せんと欲わん。壽終えてみなまた三惡道に更らざらしめて、すなわち我が国に生まれんこと、心の所願にあらん。しからずは我作仏せじ」と。こゝいう願が出て来るんです。これはすぐわかるように、過去の世に悪のために名字を聞いた。つまり仏法を利用した。例えば皆さんよ

くご存知の堤婆達多。これはお釈迦様の仏法を利用して、そしてお釈迦様を殺して自分が王様になろうと企てた。そういう仏教の関わり方をした者と、「および正しく道のために我が国に來生せんと欲わん」、正しく浄土に生まれたいと思つて、正しく仏道を学んだ人と、「寿終えてみなまた三惡道に更らざらしめて、すなわち我が国に生まれんこと、心の所願にあらん」。つまり、仏法を利用して、自分の名譽や地位のため仏法を利用して、そういう悪のために仏法を利用した者と、正しく仏教を学んだ者とは、どちらも三惡道には帰らないでほしいと。そしてどちらも仏にならなければ私は仏にならんと誓っているのが阿弥陀仏です。

いやあ、このへんしかし大事なことですよ。人ごととして聞くと、堤婆達多かと思うかも知らんけど、私たちの日頃の生活を見ると、なかなか仏法に向かっているとは言えないね。けれども「仏法に向かつていようと向かつていまいと、どちらも救い取るのが阿弥陀仏です」と、こう言っている。そういう文章をと言うか、そういう願文を親鸞聖人はわざわざここで引いてきているわけですね。この十七願の諸仏称名の願というのは、前に説明しましたように、「私は阿弥陀仏として名号が世界中に広まってほしい」と。それは自慢したいんじゃないかと、「私はどんな人でも救いたい、根源仏になりたいのだ」と。こう誓っているわけですね。ですから根源仏になりたいということをもつともっと突き詰めて行けば、「どうにもならん奴もなる奴も、どつちとも救うのが名号だ」と。こう言っていることになります。そうですね。

そういう諸仏称名の願の意味を今言ったように広げて、そして、ここで「經文引証」を親鸞聖人は丁寧にやつていつているわけですね。皆さんこれを読むと眠たくなってくるでしょう。まあしょうがないね、それは。このへんは博士課程のゼミなんかになると目がキラキラ

してくるごです。「なんでこんなことを言うのだろう」と。「親鸞何でこんなややこしいことを言うのだろう」と言つて、目をキラキラして「わからん、こんなもんわからん」と言うわけですよ。だから「何言うとのんや」と。「宗祖がこう書いとるには理由がある」と。「これはこう言うことじゃないでしょうか」と言つてやるのが僕の仕事や。それによつて着地していく。そうするとここは、今言ったように、どうも諸仏称名の願という枠内では納められないような問題を、「三誓偈」つて言つたらこれ四十八全部ですよ。それから「東方偈」もこれ全部納めて歌つた歌ですからね。そうすると、ここは行の巻だけでは収められないような問題も含めて親鸞聖人が「經文引証」してるということがわかります。

そして、今言ったように「過去世にいいことをした人も悪いことをした人も、どつちも救い取りたい」。こう誓つてね、その次にまたこれややこしいことを言つて申し訳ないんだけど、せつかくやから読みますよ、もう。寝ろろろが寝るまいが(笑)。いきなり、「阿闍世王太子および五百の長者子、無量清淨仏の二十四願を聞きて、みな大きに歡喜し踊躍して、心中にともに願じて言わまく」、「阿闍世王太子および五百の長者子」というのは、これはいくつか問題がありますが、阿闍世のことだと。阿闍世と言うのは仏法に背いて來た人。その阿闍世のことなのか、それとも阿闍世の息子のことなのかは特定できませんが、いずれにしてもこれは仏法に背いて來た人の象徴的な名前。その仏法に背いて來た「阿闍世王太子および五百の長者子、無量清淨仏の二十四願を聞きて、みな大きに歡喜し踊躍して、心中にともに願じて言わまく」、「我等後に、作仏せん時、みな無量清淨仏のごとくならしめん」と。わかりますね。この『平等覺經』を聞いてね、今まで仏法に背いて來た、そういう人たちが、「私は仏になる時には阿弥陀仏のようにになりたい」と、こう叫んだのです。「仏すなわちこれ

を知ろしめして、もろもろの比丘僧に告げたまわく」と。お釈迦様がこれをよく知って、諸々の弟子たちに今度はお釈迦様の方から告げたと。「この阿闍世王太子および五百の長者子、後無央数劫を却りて、みな当に作仏して無量清浄仏のごとくなるべし」と。わかりませぬ。この阿闍世王は今まで仏教に背いて来た。しかし今、これから必ず阿弥陀仏のような仏になるというふうにお釈迦様が皆に告げた。そして「仏の言わく」、お釈迦様が次のように付け加えた。「この阿闍世王太子・五百の長者子、菩薩の道を作してこのかた無央数劫に、みなおのおの四百億仏を供養し已りて、今また来りて我を供養せり。この阿闍世王太子および五百人等、みな前世に迦葉仏の時、我がために弟子と作れりき。今みなまた会して、これ共にあい値えるなり。すなわちもろもろの比丘僧、仏の言を聞きて、みな心踊躍して歡喜せざる者なけん」と。乃至。「このままです。

つまり、この五百の長者子、それから阿闍世王太子が『平等覚経』を聞いて、「私は阿弥陀仏のようになりたい」と言うた。だからお釈迦様はそれを聞いて、「必ず阿弥陀仏のようになるであろう」と言うた。何故ならこの人たちは、私が前の世で迦葉仏であったとき、お釈迦様は昔迦葉仏をやった。その時に私のために弟子となっていた。だから、今生まれ変わって、私は釈迦として生まれ変わって居るけれども、また私のところに来て弟子になって仏になるというふうに言うておられるんだと。だから必ずこの人たちは阿弥陀仏になるんですよと、お釈迦様が説法してるわけです。訳の分からん説法でしょう。

皆さんは、たまたま、わかるるところから言えば、真宗のご門徒のうちにお生まれになって、縁があつてここに来てくださったと思いません。しかし兄弟みんなそうでもなからう。ご兄弟が全部真宗に帰依するという事もないね。それからこの中で皆さん、ご縁をもった以上

に仏教がわかつたという体験を持った方もおられるでしょう。けれども自力無効ということを通して阿弥陀如来に頭が下がったんやね。そうすると自分の努力で仏さんがわかつたというわけにはいかん。だから「なんでわかつたんや」と言われたら、「うーん、わからん」と。「不思議や」と言わざるをえない。お釈迦さんは、それは過去世にお釈迦さんの弟子やったからやと言っているわけです。具体的に言うてそういうことを言っているわけです。阿闍世のような仏教に背く人が、やっぱり仏教に感動して帰依したと。「なんでや」と言ったら、お釈迦様が「いやいや、あれは昔過去世に、私が迦葉仏やった時に、あの人も私の弟子やったんやと。だから私が釈尊として出て来たときに、彼は阿闍世として出て来たけども、だけど今仏になる、必ず仏になる者になったのは過去の因縁が実つて仏になるんやと。それを「宿善開發」（しゅくぜんかいほつ）と言いますね。

この言葉はよく蓮如上人が使われます。もちろん仏教に出遇うためににはよほどの苦勞があつてね、昨日もちよつと僕は文章を書いて、御遠忌（宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讚法要）のために文章を書いてくれと言うから文章を書いたのですけど、まあわかりやすく言つた方がいいだろうと思つて、前にも申し上げましたかね、北陸に行った時に、僕はまだ40代ぐらいでしたけども、ものすごく激しいおじいさんが居て、そこにご住職たちがいっぱい居たのです。そうしたら、ぱつと立ち上がつて「おいこら坊主、お前らは嘘つきや」と言つて、「今まで嘘ばかり言つて金を取りやがつて」言つて、もう無茶苦茶言うのよ。「どこに浄土が西にあるか。浄土は地獄の底にあるんだ」と言つて叫んだおじいさんが居つたのですよ。まあ激しい人やつたけど、僕の話聞いたら、その通りと言つてるわけ。西の方にあるんじゃないかと、地獄一定ということを通して浄土に目覚めていくわけでしょう。そうすると地獄一定と浄土とは

これは一つになつてゐる。だから地獄一定ということが通らなければ浄土はわからんのだ。頭では体感できんのだ。だから、この体感としてわかるためには懺悔。『自力無効という懺悔』。そこに浄土に触れたという感動があるから讃嘆となる。『懺悔と讃嘆』。これが体感でわかつたと言う時の証拠。頭でわかつた時には懺悔と讃嘆にはならん。その違いがあります。

そのじいさん、まあ激しいじいさんでね、まあしかし言葉は悪い、彼が言った通りですけど、「俺のことをみんなきちがいや言うけど、俺はきちがいではない。本当のこと言う」と言つて、まあそれは激しいおじいさんでしたけど、それから僕が北陸に行くとき必ず来るのよ。一番前に座つてゐるのです。どこに行つてもこうやつて。金沢に行こうが小松に行こうが、どこ行つても居る。一番前でこうやつて座つてゐる。こうやつて手を挙げて。終わると控室に来て、「また遇えたなあ、先生遇えたなあ」と言つて涙流して喜ぶのよ。最近来んようになった。そのじいさんがね、「先生、親鸞聖人という人は厄介な人やなあ」と。「なんで」て言うたら、「普通な、法事というのは五十年で終わるぞ。あの人七百五十回もせなあかんか」(笑)。「七百五十回もするよな法事せなあかんよな人は厄介な人や」と言つて、無茶苦茶嬉しそうな顔をして言うのよ。そして「俺は二回も御遠忌に遇えたんや」と言つて、まあ今は本当に妙好人になつてゐる。なんでもかんでも「ありがたい」しか言わん。この間、脑梗塞で倒れた。「じいちゃん脑梗塞で倒れたか」と言つたら、「ああ脑梗塞で倒れた。有難いこつちや、また生き返つた」と言つて、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」言うところけど、そういう人がおるのや。まあ、すごい人やなあと思つてね、そういうおじいちゃん、わかるでしょう。「もう自分の力じやない。何かしらんけど仏さんにこう促されて念仏者にまで育てられてきたんや」と。「私の力なんか何にもないんや」と。「じいちゃん、

そらたいがい苦勞したやろう」と、「頭おかしなつた」と言つともん。「頭おかしなつて、俺はもう変になつて、みんなからおかしいと言われたんや」。「それは苦勞したなあ」つて言うたら、そのおじいさんニコツと笑つて「何言つてるねん、わしの苦勞なんか法蔵菩薩の苦勞に比べたら何ともない」とさらつとと言うのよ。そうなんよ。

本当に求道の苦勞なんて言うのは、苦勞して苦勞してやつとつみ取るということがあるのよ。人間としてはね。しかし決して自分を誇らない。私が偉かつたからとか、私が努力したからとか、そうではなくて、「いや、ようわからん」と。「先生のお育てに由るんや」と。あるいは「法蔵菩薩のお育てに由るんや」と。「法蔵菩薩のお育てつて何なの」と聞いたたら、「いやあそれはもう五劫の昔から法蔵菩薩が苦勞してくださつとるから、私は何度も何度も生まれ変わった時にお世話になつたんじや」というようなことを言つて、「私の苦勞なんて何ともない」と、こう言つて、何か軽々と生きておられますね。そうよ、まあ見事というかね…。

ですからこれは表向きに言つと「宿善を開発せよ」。自分で努力というのも一生懸命やんなさいと。しかしそれ以上に、もつと深い命のところの歩みがある。何十年、何百年、何億年とかかつてきた命の歴史がある。その中で仏縁を持つたから今やつと遇い難い仏教に遇えた。この裏には、人間などは仏教に遇えないんだということが裏にあるわけです。その遇えない者が遇えたというのは、もう私にはわからんと言つてゐるわけです。私にはわからんけど、お釈迦様が過去世に善を積んだからだと言つてくださつておると。もうそれしかわからんというふうには、これは親鸞聖人が言うでしょう「邪見憍慢惡衆生 信樂受持甚以難 難中之難無過斯」(「正信偈」、東205、西204、島12-51)。「邪見憍慢の惡衆生である私は、仏法なんて信じるような者ではありません」と。それが親鸞聖人の機の自覚です。

つまり、今簡単に、今の自力無効と言うよりも、親鸞聖人の自力無効は深く、今わかつたけども、自分のような者は仏教に遇えるような者じゃないんだと。そういう者が今仏教に遇えたんだと言う時に「宿善」と言う言葉を使います。蓮如上人はよく言うでしょう。

「宿善開発をなささい」と。「この御正忌の間に信心を勝ち獲つて（獲得して）宿善開発をなささい」と（『御文』2-9、2-11、3-9、3-12、4-1、4-7、4-8、『蓮如上人御一代記聞書』236、『歎異抄』後序奥書）。こういうふう言うでしょう。それは、私たちのような者は仏教に遇える者じゃないんだということが根にある。

よく親鸞聖人の仏教を語るときに便利がいいから、分かりやすいから、「機の深信」、「法の深信」という「二種深信」で言う人がほとんどですね。あれはわかりやすい。そしていつもお話をしたと思いますが、聖道門と浄土門の分かれ道になるのが、あの二種深信です。だから聖道門・自力の仏教から、浄土門・他力の仏教へと言う時には、二種深信が一番わかりやすい。善導大師はそういうつもりで使っています。しかし皆さんは『教行信証』を勉強していますから偉いのよ。『教行信証』では二種深信は信の巻の215ページ（西217-218、島12-59-60）に一か所だけ出て来る。それは善導大師の引文のところに出てきます。それ以外は出て来ない。引文しているだけです。だから親鸞聖人の機の自覚は二種深信だというふうに言う、便利だから言うし、またそういうふう言うとかわりやすからそう言うけど、『教行信証』を読む限りでは、そうではないということをよく知っておいてください。

親鸞聖人がご自分で自分の機を表明するときは、皆さんご存知のように「悲歎述懐」（ひたんじゅつかい）。悲歎述懐って知ってますか、聖典251ページ。ここに、真の仏弟子が終わつてからです。いいですか、真の仏弟子と言うと普通は菩薩だと思われるから、そうじ

やないんだと。真の仏弟子の本当の姿はということ、この悲歎述懐から後、親鸞聖人が明らかにしていきます。ここはまた信の巻に行つた時に言いますが、今、251ページの悲歎述懐の文章は、

「誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の教に入ることを喜ばず、真証の証に近づくとを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし」と（西266、島12-93）。これですね。ここに、せつかく仏教に触れたのに、定聚の教に入ることを少しも喜ばない。本当の覺りに近づくとを楽しまないで、むしろ愛欲の広海の方に目が向いていく。愛欲というのはどう言うたらいいか、若い時の愛欲もあるうけども、わかるね、子供が愛しい、あるいはばあさんになると孫が生まれて可愛い、そつちの方に目が行つて仏教に何にも目が向いていないと。これが親鸞聖人がご自分で言う時の機の自覚ですね。

もう一つ指摘しておきましょう。もう一つは「正信偈」です。先ほほど申しましたように行の巻が終わつて「正信偈」が歌われますね。ここに七祖の前、205ページ（西204、島12-51）、この言葉で依経分が終わつて、今度は七祖の依積分に入っていきます。その依積分の最後のところに親鸞聖人は、「弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の悪衆生、信樂受持すること、はなはだもつて難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし」。これですね。阿弥陀仏の本願の念仏は、邪見憍慢の悪衆生は、信樂を、信心を確かなものにするのは難しいのだと。難の中の難だと。信心を得ることほど難しいことはない。これが親鸞聖人の機の自覚だということに思つて下さい。

つまり、今私が申し上げていることは全部「第二十願の機の自覚」です。もつと言うと、ややこしいんですが、もつと言うと実は「三問答」という大変難しいところがありますが、この三問答の前に親鸞聖人は自分の機の自覚を述べていきます。223ページ。三問

答は、「本願が『至心・信樂・欲生』と誓われとるけれども、何で世親は『一心』と答えたんや」と言うところから始まるんですが、「それは本願が三つ誓っているけど、涅槃の覚りを開くのは一心だから、一心と言っているのですよ」と言う。それが「字訓釈」なのですが、いや、それならもう一回問うと、「それなら最初から一心でいいやないか」と。「わざわざ至心・信樂・欲生と、仏さんが何で、至心・信樂・欲生という順番で三つ尋ねたの」というのが「仏意釈」になります。

その仏意釈は225ページ、「仏意測り難し、しかりといえども竊かにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし」(西231、島12-68)。

これが『親鸞聖人の機の自覚』です。すごいでしょう。もう自分の個人を超えて、一切の群生海、あらゆる生きとし生けるものは、人間として生まれてからずっと今に至るまで、自殺と他殺を繰り返して「穢悪汚染にして清浄の心なし」。穢れ満ちて、悪に汚染せられて、人間には清浄の心なんかどこにもない。「虚仮諂偽にして真実の心なし」。嘘ごとで仮に、そしていつも媚びへつらい、偽物に惑わされて、真実の心なんかどこにもない。それは「一切の群生海」、すべての人間がそうだというのと、人間が生まれてからずっとそうだというふうに、実に時間も空間も広い世界を開いています。ここに宿善ということと関係する広い機の自覚ね。そして一切を包む機の自覚ね。それを第二十願の機、これが親鸞聖人の機の自覚だというふうに知ってください。

これまで『二種深信、二種深信』と言ってきたと思いますが、少なくとも『教行信証』と『大経』は、実はこの第二十願の機、これが要になります。『歎異抄』は『観経』によって書かれている書物ですから、機の自覚、二種深信で一貫されています。ただ皆さんご存知のよう

に第九章のところ(東629〜630、西836〜837、島23-4)には、唯円が「私は仏教に触れたけど少しも喜べないんだけど、どうしたもんやろうか」と、「私は浄土に生まれたいとも思わんのやけども、どうしたもんやろうか」というふうに聞いていますね。あれが二十願の機を表しているんです。ただそれを解決するときに、親鸞は「それは煩惱のしわざである」と、「あんたが思ってるよりも煩惱は深いよ」と。「仏教に触れたときに煩惱を超えたと思ったかもしらんけど、あんたが思うとるよりも煩惱はもつと深いんだ」と。「だから仏様が本願を建ててくださいったんだから、煩惱の所為である」と。「だから本願を上げ」というふうには、本願に帰って行くでしょう。あれが実は二十願の機を言い当てているところなのです。

ところがそれを『歎異抄』では詳しく書いてないんです。ところが『教行信証』の化身土の巻は、この十九願と二十願でほぼ埋めつくされていきます。わかりますね。なぜかというところ、「大経」の「三毒五惡」段から以降全部、十九願と二十願の問題で埋め尽くされてるからです。ですから化身土の巻をよく読むと、十九願よりも深い二十願の煩惱があるんだと。その煩惱は人間にはわからんのだと、仏の方しかわからんと。こう言うので、化身土の巻は十九願の「要門釈」、二十願の「真門釈」で埋め尽くされていきます。だから『教行信証』になると、同じ自力でも、いいですか、同じ自力でも二つに分けて、十九願の自力と二十願の自力とあるんですよ。この二十願の自力を救うということが完成して、『大経』が「群萌の救い」を実現するんですというふうには、『教行信証』になると、この二十願の機というところが大変大事になるということを知っておいてください。ちよつと時間オーバーしましたけれども休憩します。(休憩)

講義 2

それでは、もうしばらくお話をします。なんだか難しいことを言っているようで恐縮です。僕が難しいのではなく、親鸞聖人が書いた通りに言っているのですから(笑)。要するに、なぜこう言う經典の引用をしているかというところ、第十七願という枠をもっと広げて、『教行信証』全体を見ながら經典を引用しているために、ここだけを読もうとするとかからなくなる。なぜ二十願の問題が出てくるのかよくわからない。ところが『教行信証』全体を読むとよくわかります。

『教行信証』全体というのは、私たちの実際の念仏生活、それはどう言ったらいいかね、一度念仏に帰して、「自力では救われない」ということがよくわかった」と。「南無阿弥陀仏」と。「やっぱり親鸞聖人の教えは大事だ」と言つて頭が下がったと。ところが念仏生活をしていこうちに唯円が言うように、あれだけ喜んだのに、ちつとも最近は何教を喜ばなくなつた。それから、浄土に生まれたいなんて言う気はさらさらなくて、なんだか孫が可愛いとか、死んでいくのがかなわんとか、そんなことばかり言つて、これはどうなっているのだろうかというのが念仏生活の実際ですよ。それは煩惱にも二つあつて、南無阿弥陀仏と教えに遇うた時に、南無阿弥陀仏と自力を超えたということがはつきりわかつた。ところがその時に超えた自力は、はつきり言えば「わかる自力」でね、頭で分かる自力。例えば腹を立てたらすぐにわかるでしょう。「しまった、あの時にあんなこと言わなよかつた」と。「ああ、またあの人にあんなこと言つて、ろくなことはない」と思つて、また夜寝られんやろう。反省するやろう。反省するということとはわかる自力よ。腹を立てる、物が欲しい、人にしがみつくと、何でもかんでも自分で立たないでしがみついていく。しまった、ということとはよくあるでしょう。それは反省する、反省する。それは仏

教に触れてなかつたら反省もしない。それはしない、しない。それは人間は孫を可愛がるのは当たり前なんやから。それから、金儲けして食べていかなあかんのやから、どんどん金儲けしたらいいわけで、別に何も恥ずかしいことでも何でもない。ただ仏教に触れてるから、「俺、こんなんであんなやろうか」という気が何かどこにある。それはわかる自力の反省をしている。

ところが仏教を超えたということがあつたとしても、「わからない自力」は人間には超えられない。わかるでしょう。本能にまでなつている自力があるでしょう。うまいこと言えへんけど、何時かも言つたでしょう、どこかに法話に行つて、あとで飲んどつたら、おもしろいじゃないかおつてさ、おもしろいじゃないか、あれは偉いじゃないかやつたなあ。

「先生、俺ね、女に苦労した。したらあかなくてわかつてんやで。わかつてるのやけど、これ(手)が行くのよ、こうして。なんぼ言うても行くのよ。」と言つてケラケラと笑うのよ。もうどうにもならんやと、自分で反省しても反省しても、下からつきあげて来るような、そういうものが人間にはみんなあるという。それは反省を超えているから反省できへんやというわけです。その自力を超えたと言つた時に、最初はとにかく十九願も二十願も超えたと思ふやけど、反省できる方は超えたところ、反省できん方は超えられんから、何時まで経つても何か晴れ晴れしない。このまんまで仏法を聞いたとて本当に浄土に生まれるのやろうか。このまんまでだめなんじゃないやろうかと、いつもこういう不安が付きまとう。それを二十願の機と言います。

それはね、『大経』がそうなるの。それともう一つ、ごめんささい僕は言い忘れた。この行の巻の、丁寧に私はここまで言いましたね、『無量寿如来会』が引かれて、そして「三誓偈」と「東方偈」が引かれて、そして「大阿弥陀経」と『平等覚経』が引かれて、二十四

願經の第四願が引かれる。『平等覺經』も同じように十七願と十八願が一つになっているのが引かれて、その後二十願の機がずつと出て来る。そこまで言いましたね。そしてその次のページをはぐつてくださ。そこに歌が出て来ます。

「吾等が類、この徳を得ん。もろもろのこの刹に好きところを獲ん。無量覺、この決を授けん。我、前世に本願あり。一切の人、法を説くを聞かば、みなことごとく我が国に來生せん。吾が願するところ、みな具足せん。もろもろの国より來生せん者、みなことごとくこの間に來到して、一生に不退轉を得ん。」(東160、西144～145、島121～129)

これは「東方偈」です。160ページ。ですからこの第十七願の一番最後は「東方偈」で終わります。そして最後に『悲華經』。161ページです。この文章で終わっていくのですが、『大經』のところは、ここに『大阿弥陀經』、それから『平等覺經』があつて、そしてここに長く「東方偈」の歌が今度は実際に歌われます。そして最後に『悲華經』が出て来ます。ですから、そういう意味では、『大經』の引文は「東方偈」の歌でまとめられることになります。

ですからこの「東方偈」と言うのはものすごく大事なですよ。ものすごく大事な歌なのです。こう見てきますと、申し上げたように第十七願の願文は最初のところに出て来るだけで、あとはどっちかと言うと「三誓偈」と「東方偈」。『無量壽如來會』も「三誓偈」と「東方偈」で願文は出て来ない。そして『大阿弥陀經』と『平等覺經』と二十願の機が出て来て、最後には「東方偈」の歌で終わるといふ。そうなる、この行の巻の「經文引証」の一番大事なのは「東方偈」だといふことがわかります。ね。「東方偈」だといふことがわかります。なぜこうなっているかという、先程申しましたように、人間の自力は今始まったものではありません。人間が生まれたときから永遠に続

いてきている自力ですね。それは、たかだか私のように70年ぐらゐ生きたくらいでは超えられない。反省しても反省しても下から出て来る。反省が届かない。そういう自力を持った者は本来仏教に縁はない。ところが、たまたま先生にお会いして育てられた。それから、たまたま皆さんのように真宗のご門徒に生まれて仏教にご縁を持った。そして聞法してる間に、「どうも親鸞聖人は嘘は言っていない」といふことはわかると。そんなふうになら育てられて来た。

『大經』の念仏は、永遠の昔から続いている人間の反省が届かないような自力まで救い取つて、はじめて「群萌の救い」になるから、だから親鸞聖人は、「三誓偈」と言つたらこれは四十八全部です。全部ですが、特に四十八の中で、「十方衆生」というふうに呼んでいる願が三つある。十八願、十九願、二十願。ここに十九願の自力と、二十願の自力を十八願の本願が救うのだと親鸞聖人は「三願転入」とのところで言う。だから四十八のこの三つの、今言つた少なくとも私たちがと直接関係している機の三願、十八、十九、二十。これを全部包んで「東方偈」が歌われている。全部包んで「東方偈」が救われた歌ですから、その全部が救われていったんだといふ歌をお釈迦さんが歌っているんだから、だからこの「東方偈」のところに、なぜそういう自力を持つている衆生が救われたのかといふことが歌になつて歌われています。

今日は時間がないので、「東方偈」を一回読んだ?「読んだ」。読んだ。そんなら僕が忘れてるのや。「東方偈」の前半は二十二願。知ってる?書いてる。ばあちゃん書いてる。偉いなあ。年寄りばあちゃん忘れるように書くからな(笑)。偉い偉い。あのね、47ページから「東方偈」の歌が始まるでしょう(西43、島1-41)。そしてこれ、浄土に凡夫まで救うような仏さんがおるのやつたら遇うてみたいと言つて、浄土にみんな遇いに行くのよ。わかるね。そうしたら阿弥陀

さんに遇うて、みんな「自分は阿弥陀さんのようになりたい」と言つて、阿弥陀さんの国から自分の国に帰つて、「自分の国を阿弥陀の浄土のようにしたい」と言つて教化する。それが前半です。

49ページの終わりから5行目、「恭敬し歡喜して去いて、還りて安養国に至らん」。(ここまでが前半です。ここまでが二十二願です。浄土に生まれて浄土から教化に帰つてくる。その後、「もし人、善本なければ、この経を聞くことを得ず」。ほら、ここに出てくるでしょう。「善本がなければ経を聞くことはできない」と、そして「清淨に戒を有てる者、いまし正法を聞くことを獲。むかし、さらに世尊を見たてまつるもの、すなわち能くこの事を信ぜん」。お釈迦様を昔見た人は、初めて仏教が信じられるのですよと。ここからは場面が変わつて二十願の機について説かれます。

そして50ページを開けてください。ここに親鸞聖人の機の自覚がそのまま出て来る。

「憍慢と弊と懈怠とは、もつてこの法を信じ難し。宿世に諸仏を見てまつれば、楽しんでかくのごときの教を聴かん」。わかりますね、邪見憍慢悪衆生の懈怠の自分のようなものは、過去の世に仏に遇つていなければ、仏法に遇うはずがなかった。

「声聞あるいは菩薩、能く聖心を究むるものなし」。声聞や菩薩は、声聞や菩薩と言われる人も、確かに清らかな心を極めているのである。しかし仏とは違う。だから声聞や菩薩は本当の意味で人を教化することはできないんだと。これは言葉が悪いけど、そのまま言うよ。

「例えば、生まれてより眼が悪い者が人を導こうとするようなものだ」と。声聞・菩薩、それは自力で一生懸命清らかな心を極めたとしても、それは本当は人は導けないのだと。それに対して、「如来の智慧海は、深広にして涯底なし」。阿弥陀如来の智慧の海は、広くて深くて岸はないのだと。「二乗の測るところにあらず。唯仏のみ独り

明らかに了りたまえり」。わかりますね。要するに二十願の機を見破っているのは阿弥陀の智慧だけだと言っているのです。二十願の機は煩惱が深くて、人類始まつて以来の深さを持っている。しかしその深さよりもつと深い如来の智慧海は深広にして涯底なし。如来の智慧海は人間の煩惱よりもつと深いんだと。だから阿弥陀の智慧以外に、私たちが反省できない二十願の機を見破っている者はいないんだと。こういうことです。そして「たとい一切人、具足して」云々と、ここからは真の仏弟子になるということが説かれていきます。

そんなふうに「東方偈」は前半が第二十二願、後半が第二十願になっています。もう一度申し上げますよ。第二十願の機というのは、いくら反省しても人間の反省が届かないほど深い自力。ところがそれを見破っているのは阿弥陀しかいないのだと。その阿弥陀の浄土から出て来た人が法然なのだ。二十二願というのは阿弥陀の浄土からこの世に来て教化して下さった人。そういう意味ですね。だから阿弥陀の智慧を讃えて、この世に出て来て下さったのは親鸞聖人にとっては法然なのだ。その法然上人の教えによつて、第十九願だけではなくて、二十願の自力までも見破られて、私は「三願転入」を書くのです。というふうに、親鸞聖人の信心は「二種深信」ではなくて「三願転入」です。十九、二十、十八。十九願の自力と二十願の自力。これを包んで十八願の世界に救われていった。ここに『大経』が「群萌を救う経典」であるという証拠があります。

だから「大行」、「南無阿弥陀仏」を表すこの大行釈の引文をよく見ると、第十七願だけでは十分に抑えきれないような二十願の問題まで出して、そして最後に二十願の機を救うのは阿弥陀しかいないという歌でまとめ、『大経』の大行というはたらきを、十九だけではなくて、二十願の機まで包んで救うのですよということを言おうとするために、ここはこういうややこしい引文になって、そして『大

『大経』は、この「東方偈」でまとめられるのはそういう意味です。二十一願と二十願。これが実は、何でこういうことをするのかというふうに解けなかった。難しい、ここは。何でこういうことになっているのか参考書を読んでも、ちゃんと書いてる参考書はほとんどないですね。何でこういうことになっているのかということ長いこと悩みましたけれども、『大経』がその通りになっています。だから親鸞聖人は『大経』の通りに書いている。『教行信証』は『大経』の通りに書かれている。というふうに思います。

『大経』がそのようになっていくのは…、ここ消していい？写真撮った？今日は解説ばかりになっちゃってごめんね。だけど大事なことを言っているのよ。『教行信証』の親鸞聖人“を言っているのよ。『教行信証』が主著だから、だから『教行信証』に依らないと親鸞聖人の思想は正しく理解できないと考えてもいい。だから、しっかりとくしく言ってるわけです。

普通は二種深信で機の自覚は終わらせるところなのよ。ところが『教行信証』はそうになってない。なぜかというところ、皆さんよく知っているように、『大経』の「三毒五悪段」というところがあるやろう。57ページ。ここから三毒五悪段というところになります(西53、島1-50)。ここは、『大経』の一番最初のところに廻心が説かれる(「発起序」、釈尊と阿難との出遇い)。廻心とはわかりますね。南無阿彌陀仏と頭を下げて帰依することね。ですからそういう人間が、今度は念仏生活をする。その念仏生活を説くのが、この三毒五悪段以降になります。先ほど申しましたように、南無阿彌陀仏に帰依して、自分は仏教がわかったというふうに出発するんだけど、念仏生活を見ると、「貪欲」と「瞋恚」と「愚痴」と、こう言う「三毒」にまみれて生きるほかはないのだと。わかりますね。

清沢満之という先生が亡くなる時に、最後に暁鳥敏という人に

お手紙を出して亡くなっていくんですけども、その最後のお手紙にね、『大経』の核心(眼目)は、この三毒五悪段(の二文)にある」(『清沢満之全集』第9巻 信念の交流一書簡 305頁)と言って死ぬんです。その時に、注意をしてほしい言葉があると言って、亡くなる五日前に書いた手紙ですから、まあほぼ遺言のような手紙なのですから、暁鳥敏さんに言うのですね。その時に聖典57ページの終わりから5行目、ここに、「宜しくおのおの勤めて精進して、努力(ゆめゆめ)自らこれを求むべし」。こういう言葉がありますね。これは印を付けておいてください。「宜しくおのおの勤めて精進して」。こういう言葉があると。要するに、皆さんしっかりと念仏をして浄土に生まれたいと思いなさいと。こういう意味です。ところが実際は58ページを開けて下さい。ここに、「然るに世人、薄俗にして共に不急の事を諍う。この劇悪極苦の中において身の営務を勤めて、もって自ら給済す」。ここを訳しましょうか。しっかりと念仏を称えて浄土に生まれなさいと。けれども世間に生きる人は軽薄で俗っぽく、だれもが不急のことを争う。しない方がいいことばかり争っている。「この劇悪極苦の中において身の営務を勤めて」、そういう苦しみの中にあつて、自分の身を養うということばかり勤めて、「もって自ら給済す」。自分を「それでよし」とする。要するに、「尊もなく卑もなし。貧もなく富もなし。少長男女共に錢財を憂う」。わかりますね。急がなくていいことばかり争い合つて、苦しみの中で自分が食うていくことばかりを考えておると。それは尊いとか卑しいとか、貧しいとか富んでいるとか、年がいつているとか年がいつていないとか、男とか女とか関係なく、全部金に憂いている。「有無同然なり」。ある人もない人もまたそれに憂いている。「憂思適に等し」。どんな人も金に苦しんでいるというのは等しいのだと。こんなふうには、「心のために走せ使いて、安き時あることなし」。一生金のために追い立てられまくって、結局はそれで死んでい

く。それが貪欲。こんなふうには念仏生活にはならん。貪欲。いつもこれに振り回されて生涯休まる時がない。

それから59ページの終わりから7行目、93の文章、「世間の人民、父子・兄弟・夫婦・室家・中外の親属、当に相敬愛して相憎嫉することなかるべし」。わかりますねえ。父と子、兄弟、夫婦、それから親族、お互いに仏様の子として尊敬し合い、憎しんだりうらやんだりすることがあつてはならんと。「有無相通じて貪惜を得ることなかれ」。金が有る人も無い人も、自分のものを惜しんではいけない。有る者は無い者にあげなさい。無い者は有る人からもらいなさい。「言色常に和して相違戻することなかれ」。言葉も姿も必ず和合して、つまりにこやかにして、お互いに喧嘩してはいけません。「ここから瞋恚が始まります。「世間の人民、父子・兄弟・夫婦・室家・中外の親属」、ここからが瞋恚ね、わかるね。

そして、その瞋恚が60ページの終わりから8行目、瞋恚の結びのところ、ここにも印を付けて下さい。「努力(ゆめゆめ)修善を勤めて精進して度世を願え。」という言葉が出て来ます。これは「宜しくおのおの勤めて精進して、努力(ゆめゆめ)自らこれを求むべし」という意味と一緒にですが、「勤めて精進して念仏を称えなさい」という言葉がまたここで繰り返されて出て来ます。そして愚痴の煩惱になります。

つまり清沢さんが言うのは、この二つの大切な言葉に貪欲と瞋恚が挟まれていると。そして愚痴だけは挟まれてない。しかも、ここは「宜しくおのおの勤めて精進して、反省しながら頑張りなさい」と書いてある。ところが愚痴の煩惱になると、これは反省が届かないから、61ページの大事な文章を申し上げます。終わりから8行目のところ。これは愚痴の煩惱のまとめのところになりますけれども、こ

こに「かくのごときの人、瞋冥抵突して経法を信ぜず。」と出て来ます。わかりますね。このような貪・瞋・痴に狂っているような人は、心が愚かで、暗くて、何をしても人生の中で突き当たって、どうにも身動きが取れないようになってるのは経法を信じてないからだ。

「心に遠き慮りなし」。目先の金のことばかりに走って、必ず浄土に生まれたい、そういう遠い願生心なんてどこにもない。「おのおの意を快くせんと欲えり」と。今の自分の根性を満足させるものばかりを求めていく。だから「愛欲に痴惑せられて道德を達らず」。道德と言うのは仏教です。愛欲に狂って仏教がわからんからだ。「瞋怒に迷没して財色を貪狼す」。怒り腹立ちに狂って、結局財産やそういうものをむさぼって生きることになる。「これに坐して道を得ず」。だから仏教がわからんのだと。「当に悪趣の苦に更るべし。生死窮まり已むことなし。哀れなるかな。甚だ傷むべし」。この文章が、さつき私が申し上げた親鸞聖人の「悲歎述懐」のもとになっているんですよ。「愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ること喜びず、真証の証に近づぐことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし」と言う、あの「悲歎述懐」のもとになっている文章です。

ところが、このもとになっている文章の愚痴のところだけは仏教との関係で述べられていきます。もう一回言いますよ、「かくのごときの人、瞋冥抵突して経法を信ぜず」。仏教を信じてないからだ。それから「おのおの意を快くせんと欲えり」「愛欲に痴惑せられて」、これは愚痴の煩惱ですけれども、「愛欲に痴惑せられて道德を覚らず」、仏教がわからんからだというふうには、この愚痴の煩惱のところで「おのおの智慧との関係で説かれています。そうやね。そうなのところ。言つとることわかる？ みんな下向いとるけど、聖典読んどのんか寝とるんか、どっちや(笑)。なんかみんな下向いとるから、聖典一生懸命読んどのんかと思つて、よう見たら、なんか寝とる人

もおるし(笑)。これ、『大経』がよくわかるやろう。ここは「努力(ゆめゆめ)精進しなさい」と説いとるんや。つまり反省できると。だから反省するところは反省して念仏しなさいと説いている。

だからここ(貪欲・瞋恚)は、第十九願の自力が説かれている。ところが愚痴の煩惱は、これは反省ができないから、人間には。だから「如来の智慧海は、深広にして涯底なし」という、あの仏教の如来の智慧海でしかわからんのだと。だからここは第十九願の自力と区別して二十願の自力を説いているところだと。こんなふうには『大経』の三毒五悪段でも、反省が届く自力と反省が届かない自力と二つに分かれて説かれていると。親鸞聖人はそれをよく知って、当たり前のことやけど、知っておられて、「無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところもおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず」(『一念多念文意』東545、西693、島19-10)と言われた。だからちやんと親鸞聖人も仏教に触れたときに、自分で反省できないような、こういう深い自力をめぐり出されて、まあ、めぐり出されたというよりも、群萌に帰させられたのです。

僕らはすぐ、いい者になろうとしようが。もつといい者になって救われようとしよう。親鸞聖人だつてさ、越後に流されたらう。その時はまだ若かつたやん。越後に流されるのも、これは法然上人の恩徳やと。自分が越後に行かんかったら越後を教化する人はおらんやないかと言って教化に出かけて行つたのよ。ところが、「教化」なんと言するのは、これは「敗北の歴史」やからね。こつちに立つてごらん、わかるから。私は本気でしゃべつとんのやで。ほとんど寝るぞ(笑)。ほんまにもう情けない。こつちに来てごらん、ようわかるから。みなさんを非難しとるわけじゃない、僕もそうやつたんや。こつちやって寝とつたんだ。そしたら松原先生から机をデーん!!! たたか

れて何べん起こされたか。寝るんだ、一生懸命こんな大事なこと言うとするのと思うけど、寝ろうが、それと一緒に。教化いうのは、何ぼしても何ぼしても教化にならない。

そのうちに、ひよつとして俺が教化して、今までみんなを教化しよう思うて来たけど、そんなんじゃないんじやないか。自分も十方衆生の一人なんだと。消えない自力、反省できない自力がある。これは仏教がわかつた人でもわからん人でも一緒にのさ。だから仏教がわかつたということまで手を放してもうて、今まで、仏教はわかつたと思つて私は一生懸命やつて来たけど、もうそれもどうでもいいと、みんな一緒になんやというところに帰つて行くのよ。この二十願の機というの。

私たちの先輩に訓覇信雄(くるべしんゆう)という人がおつたけど、訓覇さんよう言うつたわ。「仏法は、廻心なくして真宗無し」。「廻心がない奴は仏教なんかわからん」。だけど、「廻心があつた言うて仏教をつかむな」と。「つかんだ手をもう一回放せ」と。「そこまでいかんと親鸞聖人の信仰ではない」と言うつた。「つかんだものは放せ」と。だから、「わかつたと思つて今までやつて来たけど、よう考えたら、わかつた人もわからん人も、これは仏様が「群萌や」と言うつた通りや」と。「私も「十方衆生の一人になりきつて」仏様の第十八願の世界を仰いでいく者になりました」と言うのが、この二十願の機の最終的な着地点やと思ひます。その時に、ようよう、よくぞ、反省できないような自力を教えるために二十願が建てられたものやと。あれは人間がわからんことやから、こつちからすると、「どうして俺みたいなのな者が救われるやろうか」という思ひばかりで苦しん来たけど、「もういい」と、「放す」と。「救うのは向こうの責任やから、こつちから自分が救われるということを決める必要は全然ない」と言つて手を放してしまつて、そして「群萌の一人にな

りきつて、初めて「果遂の誓い、良に由あるかな」(かすいのちかい、まことにゆえあるかな)(「三願転入」東356、西413、島12-187)と、「この二十願が建てられていると、有りがたい」と、だから「二十願と十八願とは重なるんだ」と。最後には「手を放しなさい」と言う、そういうところに親鸞聖人の「群萌を救う仏教の核心」があります。

ですから『大経』はそれを教えているんだと清沢さんは言っている。ここに貪欲と瞋恚の二つを囲んでいるやろうと。この囲んでいる自力と、愚痴の自力とは違うのよと。貪欲・瞋恚は十九願、愚痴は二十願なのよと。そして二十願は浄土から来た二十二願の意味を持った先生でなければ二十願の機は教えられないんです。だから皆さんも、仏法を聞く人をよく見定めとかなとあかんよ。私のような者の話を聞いていると、ろくなことはないかもしらんよ。一緒に地獄に堕ちたというようなもんで。

もう少し言うと、この二十願の機と言うことをはつきりと自覚させられて初めて自分の先生が浄土から来た人なのだといい切ることが出来ます。何故なら、私が反省できない煩惱まで見抜いたからだと、言うことができる。だから親鸞聖人の機の自覚は、この二十願の機だということがわかっていたら、有りがたい。『教行信証』、『大経』はそうなる。僕が言つとるんじゃない。そうなる。ね。ちやんと十九願と二十願とが分けて説かれている。

だから親鸞聖人の化身土の巻は、最初は十九願について説かれる「要門釈」。化身土の巻の半分は要門釈、第十九願について説かれる。後の半分は「真門釈」、二十願について説かれる。だから化身土の巻はほとんど自力について説かれている。要門と言うのは『観経』よ。經典に直せば、これは『観経』よ。真門釈は『阿弥陀経』やね。だから、要門釈と真門釈を説いて、『観経』と『大経』の表向きの意味と

裏向きの意味を説く。それから真門釈では『阿弥陀経』と『大経』の表向きの意味と裏向きの意味を説いて「三経一異の問答」を開く。わかるね、「三経一異の問答」。『大経』、『観経』、『阿弥陀経』は表向きには、それぞれ自力を尽くしなさいと説いている。これは自力を超えたと思うても超えてない自力があるよと。『阿弥陀経』の中にあるうが、「執持名號、若一日、若二日、若三日、若四日、若五日、若六日、若七日、一心不亂、其人臨命終時」(東129、西124、島3-5)というのがあろう。あれ、一心に念仏を称える、それしかできんのよ、人間は仏教に触れたら真面目になつて。そしたらもつと広く言うと、二十願の機というのはひどいよ、僕らと同じで、香を焚いて花を立てて阿弥陀さんに供えて、一生懸命毎朝毎晩勤行して、そして一生懸命念仏を称えると。人間の真面目さの限界です。それしかできんのよ。

ところがそこに、それが反省できない自力なんだと言って教えているのがこの二十願の問題なのよ。わかる？ そうやって一生懸命、自分が仏になることまで自分で決めていこうとするのよ、人間の根性は。二十願の願名は「植諸徳本」。「徳本」と言うのは自分が仏になること。仏になる諸々の徳本を植え直す。自分で念仏の功を励んで、それによって仏になつて行こうとするように、自分の力によって自分が仏になることを植え直していこうとする。仏教に触れている人はみんなそうなる。しかし、それは人間として極真面目で真剣なんだから、どこも悪いことない僕らは思うんやけど、仏からするとそこに反省できない自力が潜んでるんだと。だから、必ずそれは人を傷つける。

昔、よく居つたろうが、こういう会座に、牢名主みたいなばあちゃん居つてさ(笑)、「あつこの嫁は仏法聞かん、ろくな奴ぢやない」というようなこと言うて、そして言うことを聞いてると、やつぱり正し

いこと言うとするわ、そら、ばあちゃん一生懸命。「仏教聞かなあかん、これから」って言うばあちゃんが何人か居ったろうが。言やあ言うほど孤立するんじや。僕が田川に帰ってきた時居ったよ。名前は言わんけど、じいちゃんが。「俺は先生、仏教大事や言うて若い奴に言いまくつとるけど、言いまくればまくるほど、俺は何か間違うたこと言うてねえと思うのやけど」言うて。「うん、そやそや」と聞いてやる。それは仏教に一生懸命になると、自分で反省できない自力がそこに混ざつとるから、いつの間にかそのようになっていくという。

だから人間の真面目さというのは、まあ立派な心だけでも、仏法から言うと、そこに反省できない自力と混ざると反省が今度は届かんようになるから怖い。どこまででも行くから。そんなふうには、諸々の仏になるということを植え直していくような自力、それを教えるための願まで建てられとったという。反省できない者を仏様の方がちやんと願を建てて教えて、それを破るものは二十二願、阿弥陀の智慧を持った二十二願の先生しかありませんよと。最後には「持った手を放しなさい」と。群萌の一人に帰って、「もういい」と、「仏になるかどうかは仏さんのことや」と。「私は人間として、念仏者として生涯尽くします」と。そこに立ち帰って親鸞聖人が行く。それが「大行」と言う念仏の意味です。『教行信証』全体から見たときのね。

だから行の巻だけ見て、あの「経文引証」が解けないのは、化身の巻の問題まで包んでいるから。初めからちゃんと親鸞聖人がご自分で書いているのだから。二十願の問題が救われないと群萌の仏教にならないからね。だから最後まできちつと「経文引証」をやっているために、表面的に見ただけでは難しいです。まあ表面的に見ないでも難しいかもしれませんが。

時間が来てしまいました。今日、せつかくコロナの中でここまで来たらんやから、難しいこと言うたろうと思って(笑)、というか大事ところ

を言おうと思つて、なかなか今のところは難しいところです。しかし『教行信証』『大経』はそうなっているのです。だから親鸞聖人は二十願の機、これを大事にした。言つておきますけど、七祖の中で二十願の機まで明らかにしたのは親鸞聖人が初めて。一人です。だから本当は「八祖」なんです。そう考えていいと思います。それじゃあ今日はこれで終わります。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

質疑応答

質問者1:・・・どうもありがとうございます。先生がかなり時間をオーバーされたので、簡潔に言う質問の意味がわからないかもしれませんが、今日の話ではなくて申し訳ないのですが、どうしてもちよつと詳しくお尋ねしたいと思つて、前回の話で、先生がいつちよつと「信心をいただく」でも、「涅槃の覚りに包まれる」でも、「功德の大宝海に入る」でもいいのですが、そういう世界に出されるためには、仏のはたらきで、因のはたらき、阿弥陀になる前の因の法蔵の本願ですね、誓願と、その果の仏である阿弥陀の覚りの両方のはたらきが必要なんだというふうにおつしやつて、聖道門だったら阿弥陀の覚りだけでいいんだけど、その浄土門で凡夫、自分が凡夫って前回言っていましたよね、「凡夫凡夫と自分で言うけど、本当に思っている人はおらんやろ」って言つた、その本当に凡夫だと思つたために、この法蔵の因のはたらきが必要なんだとおつしやつたんですが、要するに、今日も確認したんですけど、浄土真宗の核心の、その「凡夫イコール「自力無効」の本当の自覚ですよ。そのために因の法蔵

の因の本願のはたらきだ必要だと、先生前回おっしゃったんですが、そこらへんを、法蔵の本願のはたらきをよくよく理解することがどうしてその本当の意味の凡夫の自覚に繋がるのか、もう少し詳しくお話しいただけないでしょうか。

先生・それは説明しようとする、できんことはないんやけど、宗祖の言葉だったら、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」(『歎異抄』後序 東640、西853、島23-13)。「五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」。こう言っていますよね。ということは、あの弥陀の五劫思惟の願と言うのは『大経』に説かれているけれども、『大経』に説かれている以上に、「今自分にはたらきかけてきている弥陀の五劫思惟の願」をよくよく案ずれば親鸞一人がためなりけり。こう言つとるわけですね。ですからそこには、今の言葉で言えれば、単に客観的に『大経』を読んでいるのではなくて、『大経』を主体的にとらえ直しているということが一つある。その時に自分一人のために五劫も時間を費やした。それはさつき言うたように人類始まって以来消えない自力を救おうとしたからだ。というふうに、法蔵のご苦労と法蔵のご苦労の深さは自分の自力の深さに対応します。主体的にとらえればね。そうやね。

だから法蔵菩薩の本願は自力の深さを教えて、そしてどこまでいっても切れない人間であったというところまで教えて、その全体を「尽十方無碍光如来」と言う一如の光、光の世界、覚りの世界で包みます。というのが「選択本願の行」の意味やね。それは君が一番わからない、「自力無効」ということがわからないから、理解しようとする。とつじつまが合わなくなっちゃうから、まず主体的にとらえ直すことができないから、どうしても經典を客観的に見て理解しよう

とする。そうすると「法蔵菩薩と何の関係があるのや」と、こういう話にしかならん。そうでなくて、人生につまりて苦しんでどうにもならん。「もう死んだ方がましかなあ」と、清沢さんもそう言っている。「死んだ方がましかなあ」と言う時に、「何を言うか」と、「命は生きていけと言うとる」と。自分が考えるよりもっと深い命の方から、「生きていけ」という促しがある。それは何物にも代えがたい力で私たちを今まで生かしたとたんや。というふうに法蔵菩薩の本願が自分の命と一つになつてはたらき出る時に、多分「親鸞一人がためなりけり」と、こう言うたのでしよう。

そして、私は今まで「凡夫だ凡夫だ」と言うてきたけど、一度も凡夫に帰つたことはなかった。今、初めてはつきり仏様の前で、「凡夫の身でありました」というふうに本願が自分の命と一つになって主体的にはたらき出たときに、理屈を超えて事実としてあるのは「凡夫の懺悔」だけです。凡夫の懺悔しかない。だから凡夫の懺悔はわかると。「私は自力無効の懺悔がありますから」と寺川俊昭先生はそう言うた。僕に。「嘘つけ」と思つたけど、ずっと付き合いましたけども、あの人は自力無効の懺悔を生きた人でした。やっぱりわかるんです、そこは。「自力無効」、それは私ははつきりしていますので、そこはわかると。

そんなふうに主体的ということとは、『大経』が自分自身としてはたらく。その本願とは何か、法蔵菩薩とは何か、それが人生の苦労を通して主体的にとらえ直されたときに、はつきりと「すみませんでした」と言うほかはない。今まで、わかると思つて頑張つて来たけど、屁みたいな頭で本当は何にもわかっていませんでした。あるのは、「生きよう」、「俺らしく生きたい」、その意欲。それが『大経』では法蔵菩薩の本願として説かれとつた。それがわからんほど私は愚かでした。というふうに、愚かの身に引き戻される。そこに法蔵菩薩の本

願の意味があるというふうに思います。

「五劫思惟、兆歳永劫の修行」というのは、「五劫かかっても兆歳永劫かかっても救われぬ私がここにあります」と言っているわけですから、それは本願によつてしかわからない罪だと思えます。だから「一切苦悩の群生海、無始よりこのかた」と言う、ああいう広い自覚が起こるのだと思います。

質問者1：はい、ありがとうございます。

質問者2：すみません。よろしいですか。先生が以前言われていた、名号はどうして「名」と「号」に分かれているのか、「因」と「果」に分かれているのかということについて、ずっとさがしてというか、考えていたのですけれども、今日講義を聞いていて、名号が「名」と「号」に分かれているのは『大経』がそういうふうになっているからじゃないか、「東方偈」が二十二願と二十願に分かれているように、あれも「因」と「果」と言う形で分けることができ、『大経』の構造がそうなっているから名号が「名」と「号」に分かれてるんじゃないのかなと思つたんですけれども、どうでしょうか。

先生：それはその通りです。因の本願の法蔵菩薩の苦勞が四十八の本願として説かれますね。そもそも、何度も言っているように、仏様が四十八もの願を建てて苦勞したというのは『大経』しかないわけです。だから四十八も建てたのは救われぬあなたがおるからです。それを救うために四十八も建てなければならなかった。同時に、今言つたように四十八の本願が本当に何かとわかつた時には、実は分別を超えて、そのままに仏様の世界にもとあつたんだということを知らせるために建てられたわけで、だからそれを「尽十方無碍光

如来」という。『大経』では。「果の覚り」を「尽十方無碍光如来」、「因の修行」は「法蔵菩薩の修行」、そんなふうに分けて『大経』は説かれてるから、親鸞聖人はそうおっしゃつたのだというのはその通りです。

今日は難しかったですか。難しいかしらんけど、何べんも聞いてき。そのうちに身に付いてくるから。大事なことを言うてるんだ。本當のことを言うてるんだ。だから、そのまま救われるということと言うてるんだ。はっきり言えば。

質問者3：どうもお疲れ様です。お願いします。先ほどの西藤さんの質問とかぶるかもしれないのですが、凡夫が救われるためにはお念仏、南無阿弥陀仏のはたらきを領解することが必要ということですね。お念仏のはたらきの「もろもろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。」を領解して念仏を具すれば、凡夫でも功德大宝海が私たちを包んでくれ、仏の世界へ解放してくださいと、こういうふうには頭の理解ですけど、このお念仏のはたらきを領解するというためには聞法聞思、現実の现实社会を生きていく中でいろいろ、それを続けていく、そして少しずつ領解していくということかなと思つてるんですけど、それでよろしいでしょうか。

先生：うん、そうですね、教えをよく聞いてね、そして教えのようにならん自分を顧みながら、悩んでいく、それがまあ生活ですわね。人間の場合は生活の方が厳しいから、しまいにはもう「神も仏もあるものか」と言うて、自分の身を大地に投げ出して、大地をたたいて泣いたと、暁鳥敏という人はそう言うわけですよ。そうしたら、「大地の方から法蔵菩薩が名告りを挙げた」と。「だから敏は大地の意義

であります」と、こういうふうに言うわけです。まあ先輩の一つの典型ですけど、一つは、実人生の中で身を投げ出して大地をたたく宿業の身に泣くような苦勞がいるのかもしれない。それを通して初めて、『大経』で説かれている、あの法蔵菩薩は何処か他のところにあると思うとつたけど、「我が命の名であつた」というふうになれば、まあ「功德大宝海の中にある」んじゃないですかね。ですから、おつしやつていることは間違いじゃないと思います。

質問者3：ありがとうございます。精進いたします。

住職：言葉の意味なんですが、「きょうもんいんしょう」といのは、どういう字でどういう意味ですか。引いて証明するということですか。

先生：うん。さつき書いとつたぞ。經典の文を引いて、証明する。ご住職はテープを起こしてくださいから、必ず『教行信証』の各巻にはね、標拳が拳がりますけども、その標拳に関する經典を、『大経』を引用して、因願、成就文、その部分を「経文引証」の部分だと言うわけです。「経文引証」が終わると今度は、龍樹、天親、曇鸞と、「論の引証」になつていきます。

住職：ありがとうございました。

田畑先生：

今日の会はこれで終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。（「恩徳讃」、終了）

田畑先生：

次回、第12回は10月14日（木）を予定しております。ご案内の申に来年の4月ぐらいまでの分、日にちを書いていただきますけど、順次先生と相談しながらお願いしていきたいと思つています。どうもありがとうございました。

【テープ起こし】安達 洋太郎さん

【添削】田畑正久先生、住職